

お高撰俳諧会所本の興行時期の再検証

付、翻刻…お高撰「^{はい}正月集」「^{はい}百戦もの語」抜書

富田和子*

はじめに

三河国高浜のお高は、蕉風俳諧師として活躍した伊勢の樗良（一七二九～一七八〇）^{〔1〕}と同年生まれであり、同じく蕉風俳諧師として活躍した名古屋の暁台（一七三二～一七九二）よりも生まれは三年早い^{〔2〕}が、没年は同じである。つまり、両者と同時代を生きた人物である。この蕉風中興期にあつて、その活躍は京都雑俳の地方化の一例として、また、地方雑俳の実態を示すものとして、鈴木勝忠氏によつて「三河高浜のお高前付」で論じられた。そして、お高以後の雑俳が狂俳へ移行することを述べられた。

本稿では、お高撰の俳諧会所本（板本）で、これまで鈴木氏によつて紹介された四六部の興行時期を再検証した上で、新たに追加する四部の興行時期を推定した。それらは初期の俳諧会所本であると推定できた。これによつて、お高撰の俳諧会所本の一つの特徴を把握できたことを論じたい。

なお、この内の二部は手控えとして書写されたものである。お高の撰は早くから書写して残したいと思われるほど人気を博していたことが窺える。そこで、俳諧会所本として完全な形態ではないが、その書写された「^{はい}正月集」「^{はい}百戦もの語」を翻刻して紹介する。まず、お高は知名度が高いとはいえないので、その略歴を確認した上で、俳諧会所本の興行年次の再検証と追加する四部の興行時期について論じたい。

一 お高の略歴

まず、お高について、『俳文学大辞典』（角川書店 平7）で述べた記事を引用して、手短に紹介する。

お高^{かた} 雑俳点者・和歌作者。享保一四（一七二九）～寛政四（一七九二）・二・五。六四歳（恩任寺過去帳）。本名、石原善兵衛。別号、桃花亭萌角。三河国高浜の廻船問屋・酒造家。俳諧は不角門人の智角門。御歌所へ出仕し、尾張・紀伊侯の基

の相手もしたと伝える『門人知奈美手記』。当時の風潮か、前句付点者として女流めかした「お高」と称し、会所も「かしく」を名乗らせ、安永元年（一七七二）から晩年まで、月三度の興行を続けた。尾張国名古屋本町角屋庄蔵に会所本を彫らせ、『はいかい角文字』（安永一）から『誹諧冬の宴』（寛政二）まで四六部が伝存。〔参〕鈴木勝忠「三河高浜のお高前句付」

〔近世俳諧史の基層〕平4

廻船問屋主人であつたお高は、俳諧を不角門人の智角に師事し、四四歳頃（数え年）に隠居の身となり、前句付点者を始めたと考えられる。その撰は月三度の興行を続けるほどの人気を博したとみえる。その伝存するお高撰の俳諧会所本は、鈴木氏によって『はい角文字』（安永元）から『誹諧冬の宴』（寛政二）までの四六部が紹介された³⁾。現在は、これに、『はいみとりの衣』（辰十二月披露）、『誹諧沖津浪』（未一月中旬）、本稿で紹介する「はい正月集」「はい百戦もの語」を加え、五十部が窺える。とはいえ、安永元年から晩年まで二〇年近く、月三度の興行を続けたという興行数からみれば、伝存するものはやはり少ない。

ここで新たに加える四部の内、前者の二部は板本で伝存し、興行年を推定できる干支の記載がある。しかし、後者の二部は、板本は未見であり、会所本の書抜き帳に入撰句が書き留められて残るもので、作者名や取次名などは省略されている。

二 お高撰俳諧会所本の興行年次の再検証

まず、鈴木氏の四六部の配列順を、興行時の干支、巻末記載の取次名・所在地、板本の特徴などから再検証するために表1・2を作

成した。表1には、新たに加える四部の興行時期を推定し加えた。

〈表の見方〉

〈表1〉お高撰俳諧会所本一覧

左端は新たに付した通番。新たに加える四部の内、干支の記載がある二部は、○付数字で表記した。干支の記載のない二部は、49・50と番号を付した上で、配列できると思われる箇所配置した。

その右の「鈴木」は「三河高浜のお高前句付」での配列順。

「開催時期」欄は、例えば、「辰年12月披露」を「辰12披」、「巳年6月上旬」を「巳6上」と略記した。

「句高（A）」欄は、原本記載の句数を記したものの。「巻末記載の主要取次と集句数（B）」欄の集句数を合計すると、36と43の二例を除いて「句高（A）」欄の数と同じになる。

「巻末記載の主要取次と集句数（B）」欄の算用数字は集句数。（一）内はそれを集めた取次の記事。「三」は三河、「尾」は尾張など、取次名の前の所在地の略記や、末尾の「公・御巻・さま・丈」の類は敬称であるが、記載のあるものはそのまま記載した。右端の「綿屋」欄の○印は天理図書館綿屋文庫に所蔵されるものの。

その左の「翻刻所在地」欄の記載は、例えば「集成1-8」は『雑俳集成』第一期8巻、「26-15」は『未刊雑俳資料』第26期15に翻刻がある意。（宮田205）は、奈良大学「宮田正信博士旧蔵和本目録」の番号。（吉沢）は所蔵者名。（コピー）は、現在、所蔵先不明で、原本コピーで残るもの。

干支などから興行年の確定するものは、13・14（未閏12）安永四（一七七五）、43（甲辰二上）天明四（一七八四）の三部。

〈表2〉主要取次一覧

縦軸には〈表1〉の「巻末記載の主要取次と集句数（B）」欄にあげた取次を配列し、横軸には縦軸に挙げた取次と関わる本を左から順に横に配列して表にしたものである。⁶⁾欄外の「その他の巻の巻元」は、この取次一覧には載らないが、巻元とわかるものを挙げた。

表中の◎は、取次名に所在地の記載されているもの。○は、それがなく取次名のみのもの。「巻」はその会所本で巻元をする取次。「巻」（斜体）は、その明記はないが、巻末の添句などから、

それとわかるものを区別したもの。

「所在地」欄は、巻末記載の取次名に添えられた地名を記した。それのないものでも、掲載句に添えられた取次名から補えるものは補い、斜体で表記した。（ ）内に、現在の市町村区分を記載した。

「〈表1〉書名一覧通番」欄は、その右に展開させた◎○のある本の通番を記載した。なお、その中の10・11・43（斜体）は原本（写真）未見。未刊雑俳資料による。

表1 お高撰俳諧会所本一覧

通番	鈴木	書名	開催時期	句高(A)	巻末記載の主要取次と集句数(B)	掲載句数	会林	撰者名表記	巻元	巻末の添句	備考	翻刻所在地	鶴屋
1	1	はいかい角文字	長12披	1,578句	1,068(尾藤江梅樹軒公)、305(三高漢亮々堂・志タ公)、205(三吉田花火組公)	56	会林かしく	撰者お高選					○
②		はいかいみとり の衣	長12披	(1,847句)	1,115(花月堂)、529句(松露堂・寛尔堂)、203句(梅樹軒)	50	かしく	撰者お高選	(千代)	御はし書略 水仙や呂南の窓にかりて映 千代 落葉によごす霽目の庭 たか拝		(宮田205)	
3	2	はいかい重ね願	巳6上	2,484句	2,016(尾藤江梅樹軒公)、236句(三福釜花月堂公)、102句(三高川原田藤軒公)、75句(三濱尾丸十組公)、55句(三小垣江松露堂公)	100	会林かしく	撰者お高選				13-11	○
49		はいかい正月集		700余吟		36		撰者お高選	高濱狐松亭		会所本の書抜き、各句に作者名の記載なし	(吉沢)	
50		はいかい百戦も の語		1,450吟		71		撰者お高選	横須か柳門		会所本の書抜き、各句に作者名の記載なし	(吉沢)	
4	3	誹諧教訓草	巳12上	2,220句、 追句50吟		100+4	三州高浜会 林賀志久	撰者お高選	尾藤須加達 梅舎(香尾)	御はしがき略之 集るやなも高濱のむら千鳥 香尾 風をもちからにうごく枯苔 たか	尾名古屋本町角屋主蔵 彫刻	46-15	○
5	4	誹諧清標	巳12下	2,435章		100	会林かしく 選	撰者お高選	(すゝめぐみ 千希)	御はしがき略之 花敷のたらず城かし客の梅 冬すゝめぐみ 千希 冬かれもなくしげきこと の葉 たか	『あかねうら』(点帖) (安永中8月上旬)より、 入章句17句を収める※	46-15	

通番	鈴木	書名	開催時期	句高(A)	巻末記載の主要取次と集句数(B)	掲載 句数	会林	撰者名表記	巻元	巻末の添句	備考	翻刻所在地	綿屋
6	5	誦諸藤のかつらの日	午5あやめ	3,095句		115		三州桃華亭 於高撰		歳暮 浪かぜの音かた つけて四方の春 桃華 亭			○
⑦		誦諸津津浪	未1中	1,560余吟		100		三州お高撰	尾横須賀遊 梅舎	名古屋本町角屋庄藏彫 刻		(コビー)	
8	6	誦諸村の長	未3中			102	会林かしく	三州お高撰	(八橋室)	御まへ書略ス はり肌 をしてまっや雪の梅 八橋室 冬もながめも ふわき言の葉 たか	板元角屋庄藏	26-13	○
9	7	誦諸ひな遊	未4上	1,323章	575句(龍組御巻)、405句(遊梅舎公)、168句(風樓舎公)、110句(梅樹軒公)、65句(お蘭さま)	54	会林かしく	三州お高撰	龍組		龍組御巻 昇句銘々御 誦名著ス		○
10	8	誦諸堪忍袋	未5下	2,403吟		115		三州お高撰	(龍見組)	前書略 見へ透て肌は ちかしき夏衣 龍見組 窓櫺のえもうへぬ香サ たか	名古屋本町角屋庄藏彫 刻	26-13	
11	9	誦諸法の幅	未6下	2,018句	1,046句(三浜尾丸十組御巻)、233句(遠浜松岡南堂御巻、185句(尾箱生里夕庵御巻)、145句(三高浜女郡花御巻)、136句(信松本蓬葉堂御巻、125句(三刈谷鼓舞堂御巻)、53句(三形ノ原大船堂御巻、50句(江高宮石寿御巻、45句(三若林料泉堂御巻)	99	三高浜会林 かしく	三州お高撰	三浜尾丸十組		尾名古屋本町角屋庄藏 彫刻 三浜尾丸十組御巻 昇 句銘々御誦名著ス	26-13	
12	10	誦諸嵯峨遊	未8中	1,886章	1,601吟(尾横須賀遊梅舎公)、182句(三棚尾八橋堂公、103吟(三刈谷鼓舞堂公)	117	三高浜会林 かしく	三州お高撰	尾横須賀遊 梅舎			26-13	
13	11	誦諸家つと	未閏12中 〔安永4 (1775)〕	1,255吟		60		三州お高撰	尾寺本玉竜 館	御はしがき有て 集め てもそれ程はなし書脈 し 巻本 香もーしは にはや映の梅 たか	(空の部あり)	26-13	○
14	12	誦諸堂広授	未閏12中 〔安永4 (1775)〕	2,601句	1,115吟(尾藤江梅樹軒公)、232句(三寺本玉竜殿公)、200句(三吉田村丸公)、160句(尾箱生里夕庵公)、141句(三浜尾丸十組公)、119句(三刈谷林泉舎公、113句(三福釜花月堂公、100句(尾簗江来亀堂公)、95句(三若林料泉堂公)、82句(尾戸田一昌堂公、73句(三徳次自賤堂公)、71句(三西尾浮橋公、67句(三下一色お蘭藤)、33句(三矢作大橋堂公)	151		三州お高撰	(扇風)	御はしがき有て 蔵せ どもその香洩来る室の 梅 巻本扇風 名はあ ゆごもり浅き谷の戸 たか、歳暮 枯木にち 師走を吹て風の音 た か	(空の部あり) 跋文に「言州鳳来堂 公・江州台寿公当国に ても所々ご延引故昇板 見合居申候	26-13	○
15	13	誦諸かまくら山	申1中	2,684句	891句(林泉舎公)、223句(吉日堂公)、191句(一昌堂公)、162句(田村丸公)、145句(梅樹軒公)、135句(鳳龜公)、130句(築亀公)、125句(花月堂公)、124句(振袖組公)、113句(里夕庵公)、103句(於蘭藤)、93句(寿川堂公)、80句(岡南堂公)、70句(餅泉堂公)、66句(丸十組公)、33句(大橋堂公)	185	会林かしく	三州お高撰	(林泉舎)	御前書略之 神はなを 人の恵も年籠 林泉舎 詞の玉の塵つもる山 たか	(空の部あり)	26-14	○

お高撰俳諧会所本の興行時期の再検証

16	14 俳諧飛鳥川	申 6 上	1,100余吟 十追巻110 余吟		78		三州お高撰	尾寺本玉竜 館(鍾雨 芥)、(追巻) 半田永栄堂	ひらきまつ花橘やさつ き会 鍾雨芥 虫をたち から闇の窓をと たか	(空の部あり)	26-14	○	
17	15 俳諧姿藏	申 8 中	1,076句		55	会林かしく	お高撰	三米津孝川 堂(里竹)	その鳥は何と啼てや稲 倉せ 巻本里竹 震し もしらす言の葉の奥 たか	(空の部あり)	26-14 (コビー)		
18	16 俳諧花の魁	申 9 下	3,310余吟		223	かしく	三州お高撰	尾藤江梅樹 軒(扇風)	啼むしの姿見せけりけふ の月 巻本扇風 野もせ に除る秋のしら玉 たか 世の人の待にし 蕎麦の鎌 入れて かしく		26-14	○	
19	17 俳諧逢坂山	申 10 中	2,666吟	1,133句(亀翁公)、353句(花月堂公)、234 句(青竜・初音堂公)、173句(吉日堂・於 蘭公)、137句(田村丸公)、134句(一昌堂 公)、120句(寿川堂公)、101句(栄亀公)、 100句(林泉舎公)、83句(酢吸堂公)、60句 (斛泉堂公)、38句(龍組公)		116	会林かしく	三州お高撰		(空の部あり)	26-14	○	
20	18 俳諧かくれざと	酉 1 下	1,100吟		50	会林かしく	三州お高撰	尾藤江栄亀	老木にも 千百喰や六つ の花 巻本 冬がれ見 せぬ山の隈 たか	(空の部あり)	集成1-8、 26-15		
21	19 俳諧喜見城	酉 4 中	1,228吟		60	会林かしく	三州お高撰	尾寺本玉竜 館(湖夕)	出軸のおそなはりしは しがき有て 延しても 空へは速し風巾 湖夕 木の芽へに景色たつ 山 たか	(空の部あり)	集成1-8、 26-15		
22	20 俳諧いなか慈童	酉 7 上	1,832句	423句(いそ浪公)、294句(吉日堂公)、200 (花月堂公)、182句(玉龍館公)、160句(於 蘭・一昌堂公)、150句(田邑丸公)、150句 (五律公)、110句(酢吸堂公)、62句(興慶 堂公)、51句(遊般堂公)、50句(林泉舎公)		122	会林かしく	三州お高撰		(空の部あり)	26-15	○	
23	21 俳諧相生松	酉 9 上	1,873句	750句(田村丸公)、555句(一昌堂公)、156 句(いそ浪公)、153句(寿川堂公)、149句 (花月堂公)、64句(遊船堂公)、46句(酢吸 堂公)		94	会林かしく	三州お高撰	(田村丸)	御はしがき有て 雪つ もれこの麓塚も山の数 田村丸 春を欺く垣の 早梅 たか	集成1-8、 26-15		
24	22 俳諧神の戯	酉 12 下	1,916句	438句(亀翁公)、368句(梅林堂公)、210句 (吉日堂・一川流公)、188句(梅樹軒公)、 173句(於蘭公)、121句(古城公)、105句 (寿川堂公)、103句(酢吸堂公)、103句(平 話果公)、88句(千丈軒公)、19句(遊船堂 公)		115	会林かしく	三州お高撰		(空の部あり)	集成1-8、 26-15	○	
25	23 俳諧無一物	戌 7 上	2,056句	1,006句(花月堂公)、317句(一川流公)、 163句(不明公)、161句(古城公)、141句 (田村丸公)、92句(遊月堂公)、92句(清風 堂公)、41句(亀見館公)、31句(寿川堂公)、 12句(子供組公)		124	会林かしく	三州お高撰		(空の部あり)		○	
26	24 俳諧忍ぶ山	戌 9	2,001句	902句(於蘭公)、200句(一川流公)、156句 (梅樹軒公)、145句(田村丸公)、137句(研 川堂公)、124句(不明公)、120句(古城公)、 101句(梅軒公)、70句(寿川堂公)、46句 (遊月堂公)		113	会林かしく	三州お高撰	(於蘭)	御はしがき有て たの しみや錦のはれを野に 山耳 於蘭 塚くらし つわたるむら鳥 たか	(空の部あり)		○

通番	鈴木	書名	開催時期	句高(A)	巻末記載の主要取次と集句数(B)	掲載 句数	会林	撰者名表記	巻元	巻末の添句	備考	翻刻所在地
27	25	誹諧むかし模様	丑6中	4,310余吟		260	会林かしく	三州お高評	尾横須加活 門亭	その間へ雲井に廣しほ と、ぎす 活門亭 お よばぬ枝を掃たる唾軒 たか		○
28	26	誹諧鳥の跡	丑7上	1,491句		91	会林かしく 評	三州桃花亭 風軒	尾名古屋涼 風軒	追善 散り浮や手向の 水に暮の花 涼風軒 菊もたせかる夏の夕霧 長久堂 物すきの心に 叶ふ宿りして 桃花亭		○
29	27	誹諧小柴垣	丑8	3,619句	1,250句(活門亭公)、429句(常盤堂公)、 314句(龍月堂公)、311句(柏吟堂公)、257 句(於瀧公)、250句(松見組公)、183句(不 老堂公・白砂軒公)、138句(大英堂公)、 106句(田村丸公)、105句(瓢庵公)、85句 (花月堂公)、82句(輪月堂公)、60句(青柳 堂公)、49句(暮雪公)	161	会林かしく	三州お高撰			46-15	○
30	28	誹諧からころも	丑12	5,600吟+ 445吟副撰	1,550句(亀鈴公)、719句(柏吟堂公)、655 句(玉龍館公)、522句(白砂軒公)、259句 (於瀧公)、201句(柳月堂公)、175句(梅枝 堂・指月堂公)、141句(扇賀堂公)、136句 (舟見組公)、113句(白水堂公)、101句(田 村丸公)、80句(輪月堂公)、80句(古城公)、 79句(常盤堂公)、72句(青柳堂公)、64句 (母ト公)、30句(朱三公)、25句(村上舎公)	370+ 20	会林かしく	三州お高評	尾横須加活 門亭(竹 逆)、(追参) 三州孝母	色かへぬ松や色添ふ初 しぐれ 竹逆 風には びこる藪の枯蔓 たか		○
31	29	誹諧をのころ島	寅2下	5,002吟		240	会林かしく	三州お高撰			46-15	○
32	30	誹諧をしほ山	丑12、 別巻寅3下 句	1,692句+ 別巻合257 句		114+ 14	会林かしく	三州お高撰	尾名古屋桂 百堂			○
33	31	誹諧墨面の橋	寅5上	2,100吟		86	会林かしく	三州お高評	尾横須加柳 巴			○
34	32	誹諧延寿客	寅5下	2,136吟		95	会林かしく	三州お高評	尾寺本邑玉 龍館			○
35	33	誹諧国の礎	寅7下	1,910句+ 別巻共合 2,565吟交撰		149	会林かしく	三州お高評	尾名古屋桂 百堂			○
36	34	誹諧時津風	寅10上	5,177吟 (5,167?)	1,160句(今川堂公)、911句(白水堂公)、 905句(一扇舎公)、518句(青柳堂公)、500 句(柏吟堂公)、220句(一川流公)、201句 (花月堂公)、144句(泰山堂公)、135句(白 砂軒公)、120句(涼風軒公)、101句(田村 丸公)、100句(柳月堂公)、80句(村上舎 公)、50句(一盞公)、22句(徳明堂公)	216+ 38	会林かしく	三州お高撰	+別撰 尾 下一色一扇 舎	「別撰 尾下一色一扇 舎巻」の後に「末番附略 ス」とあり		○
37	35	誹諧はなのかけ	寅12下	2,076吟		104	会林かしく	三州お高評	尾大野今川 堂			○

お高撰俳諧会所本の興行時期の再検証

38	36 俳諧露の台	卯 2 下	4,239 吟		100 + 8	会林かしく	三州お高撰	尾機須加百叶堂、(追加) 遠州金指可盛堂			○
39	37 俳諧ふた柱	卯 3 中	4,002 吟	1,009 句(玉龍齋公)、812 句(掬月堂公)、427 句(寿川堂・イロハ公)、300 句(白水堂公)、261 句(柿吟堂公)、245 句(涼風軒公)、245 句(可盛堂公)、200 句(自美堂公)、154 句(林月堂公)、101 句(村上舍公)、100 句(田村丸公)、80 句(風柳堂公)、68 句(白砂軒公)	200	会林かしく	三州お高撰			46-15	○
40	38 俳諧もしほ草	卯 6 下	1,174 吟		66	会林かしく	三州お高撰	三平蔵青柳舎 奉納天満宮 景すこし松や千本の青幣 桃花亭九井			○
41	39 俳諧笠の雪	卯 8 上	1,766 吟 + 159 句巻交換	1,030 句(寿川堂・イロハ公)、628 句(亀翁公)、245 句(林月堂公)、219 句(可盛堂公)、150 句(柏吟堂公)、109 句(吾秀庵公)、100 句(鳥居連公)、82 句(田村丸公)、66 句(白砂軒公)、63 句(白川舎公)	130	会林かしく	三州お高撰	尾名古屋桂百堂、寶田			○
42	40 俳諧法の花	寅 11 中卯 8 中	2,692 吟		138		三州お高撰				○
43	41 俳諧松の風	甲辰 2 上 (天明 4 (1784))	3,501 吟 (2,959?)	866 句(可盛堂様)、401 句(村雨様)、302 句(掬月堂様)、300 句(青柳舎様)、212 句(田村丸様)、200 句(寿川堂様)、183 句(小艇堂様)、162 句(白水堂様)、117 句(好述・好文堂様)、95 句(柏吟堂様)、61 句(風森堂様)、60 句(イロハ様)	168	会林かしく	三州お高撰		これ以降「甲辰」など年号を入れるようになってゐる。13-11「俳諧重ね扇」付言	20-8	
44	42 俳諧人形宮	申 11 中	710 余吟		45	会林かしく	三州お高撰	三州中村梅坂堂		20-8	
45	43 俳諧ちゑの珠	己酉 12 中 (寛政 1 (1789))	1,773 吟		117	会林かしく	三州桃花亭			20-8	
46	44 俳諧川やしる	庚戌 3 下 (寛政 2 (1790))	1,890 吟		103	会林かしく	三州お高撰			13-11	
47	45 俳諧冬の寝	寛政二戌 6 下 (1790)	824 吟 + 外 160 句交換		55	会林かしく	三州お高撰	遠州浜松玉壺斎・(外) 三州寺領味仙堂巻		20-8	
48	46 やまかつら	天明中									
番外	俳諧入重垣	辰 12 上(文化 五と書込外)	5,010 余吟		250	会林かしく	三州後お高撰	尾矢口梅二・三犬ヶ坪満梅	尾矢口梅二・三犬ヶ坪満梅丈台巻		

※『俳諧あかねうら』安永中(8月上旬) 桃華亭於高撰の点帖。311 句。ヨコスカ丸柳。未刊能俳資料 13 期 10 所収。

表2 主要取次一覧

通番	所在地	巻末記載 の取次名	披き時の丁支 (表1)書名・題番	辰1	辰②	巳3	巳4	未⑦	未8	未9	未10	未11	未12	未13	未14	申15	申16	申17	申18	申19	酉20	酉21	酉22	酉23	酉24	戌25	戌26	丑27	丑28	丑29	丑30	寅31	寅34	寅36	寅37	卯38	卯39	卯40	卯42	辰43	数○数合計	備考			
1	尾藤江(東浦町)	梅樹軒	1・2・3・9・10・14・ 15・24・26	○	○	○				○	○				○				巻					○		○																3	6	9	
2	三高濱(高浜市)	定々堂	1	○																																						1	0	1	
3	三高濱(高浜市)	志夕	1	○																																						1	0	1	
4	三吉田(豊橋市)	花火組	1	○																																						1	0	1	
5	三福釜(安城市)	花月堂	2・3・10・14・15・19・ 22・23・25・29・36		○	○									○				○				○	○		○				○												2	9	11	
6	三小垣江(刈谷市)	松露堂	2・3		○	○																																				1	1	2	
7		寛尔堂	2		○																																					0	1	1	
8	三高尾(碧南市)	九十組	3・10・11・14・15			○					○	○			○																											3	2	5	
9	三高川原(西尾市)	田藤軒	3			○																																				1	0	1	
10	尾横須賀(東海市)	逆梅舎	9・10・12・14				巻	巻		○	○		○																													1	2	3	
11	三藤井(安城・西尾)	麗組	9・10・19							○	○									○																					0	3	3		
12	三下一色(鳳来町)	お蘭 (於蘭)	9・14・15・19・22・ 24・26・29・31							○					○						○						○				○											1	8	9	
13	三孝母(豊田市)	鳳楼舎	9							○																																0	1	1	
14	三刈谷(刈谷市)	鼓鶏堂	10・11・12								○	○	○																													2	1	3	
15	尾船生(名古屋市中区)	里夕庵	10・11・14・15								○	○			○																											2	2	4	
16	遠浜松(浜松市)	周南堂	10・11・15							○	○	○				○																										1	2	3	
17	三高浜(高浜市)	女郎花	10・11							○	○	○																														1	1	2	
18	江高宮(彦根市)	石寿	10・11								○	○																														1	1	2 14の跋文 に江州	
19	三吉田(豊橋市)	田村丸 (田邑丸)	10・14・15・19・22・ 23・25・26・29・31・ 36・39・42・43							○						○				○			○	巻		○		○		○													1	13	14
20	三高浜(高浜市)	鯉見組 (舟見組)	10・29・31							○	○																				○												0	3	3
21	尾村木(東浦町)	木邑堂	10							○	○																															0	1	1	
22	三若林(豊田市)	斛泉堂	10・11・14・15・19							○	○				○				○																								2	3	5
23	信松本(松本市)	鳳来堂	10								○																															0	1	1 14の跋文 に信州	
24	信松本(松本市)	蓬萊堂	11									○																														1	0	1	
25	三形ノ原(蒲郡市)	大船堂	11									○																														1	0	1	
26	三棚尾(碧南市)	八橋堂	12					巻					○																														1	0	1
27	尾戸田(名古屋市中川区)	一昌堂	14・15・19・22・23												○				○			○	○																			1	4	5	
28	三刈谷(刈谷市)	林泉舎	14・15・19・22												○				○			○																				1	3	4	
29	三矢作(安城・岡崎)	大橋堂	14・15												○																											1	1	2	

作成した二つの表から窺えるお高撰俳諧会所本の特徴と配列を見ていく。なお、書名は、主に〈表1〉左端の通番を利用して、書名を省略して検証することにした。

まず、〈表1〉から、題に「はいかい」と平仮名で角書するものは、安永元年と推定される1・②、翌年の3の三編である。以後は「誹諧」と漢字を使うようになる。

次に、「巻末記載の主要取次と集句数(B)」欄で、末尾の「公」などの敬称をみると、②以外は記載がある。同じ「辰年12月披露」でも、1にはあるが②にはない。ここからこの頃から特に会所の存在を意識し、本格的に点者活動を始めたといえるのではなからうか。更に、名古屋本町角屋庄蔵彫刻とあるものは、4・7・8・10・12、選句の評に「空」の部があるものは、13・17・19・22・24・26というように同じ特徴をもつ会所本がたまって続いている。

また、巻元への挨拶である巻末の添句は、31頃からほとんどみられなくなる。これはお高撰の人氣が一層高まり、集句数が増えて忙しくなったためではなからうか。なぜなら、それまで多い時でも18の三千三百十余句であった集句数が、30・31・36のように五千句を超える興行も行うようになっていくからである。

次に、〈表2〉から、取次の参加傾向を窺うと、はじめに1の梅樹軒(東浦町)、5の花月堂(安城市)のように当初から長年にわたって多くの句を集めた取次があり、〈表2〉を下にみて行くと、12のお蘭(鳳来町)、19の田村丸(豊橋市)、30の玉竜館(知多市)、36の寿川堂(西尾市)、60の柏吟堂(浜松市)と、長く付き合う主要な取次が次第に増えていく様子が窺える。

つまり、鈴木氏の四六部の配列順は妥当であり、「はいかい」と平仮名で角書する49「正月集」、50「百戦もの語」は初期の撰にな

るものであろうと推定できる。そして、〈表1〉で、49・50を3と4の間に配置したことは妥当である。

他にここで着目しておきたいのは、〈表1〉に挙げた36に「末番附略ス」とあり、末番句(好色句)を掲載しないと断りがあることである。その他でも撰句順位が飛んでいるものがあり、次に示すとおり、五十巻中、十五巻で、興行時の詠み捨てにされるような末番句が高点句にとれたことが窺える。

撰句順位の飛んでいるものの、上位十一句の状況を列挙すると次のようになる。

書名通番	撰句順位
17	巻頭・三・六・(間に二句)・十一
20	巻頭・三・六・十一
28	巻頭・三・六・七・十一
32	巻頭・三・(間に一句)・六・(間に一句)・十一
35	巻頭・(間に三句)・六・(間に四句)・十一
36	巻頭・(二句)・三・(二句)・(間に一句)・六・(二句)・(間に三句)・十
37	巻頭・三・五・(間に五句)・十一
40	巻頭・四・六・十一
41	巻頭・三・五・(間に三句)・十一
42	巻頭・三・(間に一句)・六・(間に三句)・十一
43	巻頭・(間に三句)・六・(間に四句)・十一
44	巻頭・六・十一
45	巻頭・三・(間に一句)・六・(間に三句)・十一
46	巻頭・五・(間に二句)・十一
47	巻頭・三・(間に一句)・六・(間に三句)・十一

特に、二句目と四句目が省略されている。ここから、末番句はここに置かれることが多かったであろう。現代の狂俳で、「二・四・六の句は柔らかい句を置く」といった撰句基準がつたわることを考えあわせると、当時、すでに俳諧式目とは一味違った撰句基準が形成されていたことが窺え、興味深い。

まとめ

早くから俳諧師を志した職業俳諧師である樗良・曉台に対して、お高はいわゆる「旦那芸」の点者である。とかく「旦那芸」というと軽くみられる傾向があるが、安田文吉氏は、近世期における「旦那芸」は、それまで大名のものであった文芸が町人のものになった証であり、「旦那芸」であることが重要であると指摘される。

そのようなお高が本格的に点者活動を始めたのは、1「^{はい}角文字」・②「^{はい}みどりの衣」の披露のあった安永元年頃ではなかったか。そして、題に「はいかい」と平仮名で角書するものはその安永元年頃だけで、それ以後は「俳諧」と漢字を使ったということが推測でき、お高撰の俳諧会所本の特徴の一つが窺えた。

そして、当時、すでに俳諧式目とは一味違った撰句基準が形成されていたことが窺えた。これは現代の狂俳で重視される撰句基準につながるものであった。

そこで、お高評49「^{はい}正月集」、50「^{はい}百戦もの語」を翻刻する。

なお、名古屋本町角屋庄蔵については、稿をあらためて考察したいと考えている。

書誌

○『^{はい}正月集』

二五・一×一七・五糶。墨付二五丁（表紙共）、共表紙、白紙四丁、全二九丁。

複数の俳諧会所本の書抜きで、「^{はい}正月集」「^{はい}百戦もの語」（以上、お高評）、無題（死一坊評）、「俳諧むかし扇」（濃州 陽臺評）、「^{はい}貢もの」（三陽 桜木庵評）、無題（不明）、無題、「奉納取」「奉納六ヶ所」（以上、勢 随風舎志柳撰）を収載する。上位句を書写するが、作者名などは書かれていない。本書名は、最初に書写した会所本の書名による。

題中の△（笠付）は、五文字目（笠題の下）に作者が「てにをは」を加える伊勢笠付形式になっている。

安城市 吉沢義夫氏蔵本

凡例

翻刻にあたり、読解の便をはかって、次のように扱った。

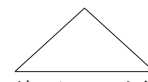
- 1、濁点、凡例に句読点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。
- 2、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、例外もある。
- 3、慣用・誤用の漢字やかなづかいは、誤解のないと思われるところはそのまま残した。
- 4、校者の注は（ ）に入れ、又は*印で示し、本文中に加えた。
- 5、会所本にはないと思われる見消（二箇所）は省略した。

○『はい正月集』

高浜弧松亭巻
句数七百余吟

かはい正月集

お高評



酒瓶 安もの 皮財布
よろつき 箱入 大晦
やあゝ 宮上ヶ 杵にも
破れた 仕出した

表紙

句百

置ぬ棚をば捜し社すれ

モチモ

扱もやれゝ

タムト

独くらしてゝ

ツイテ

恋の計略ゝ

袋にいれる物

はり上て天井なしに張上げて

蒔ちらす

百も式百もゝ

ツキ

間に合ぬ事ゝ

手を打てからは

実も実也ゝ

持せては置ぬ

千鳥鳴也ゝ

見返し

巻頭

独 よみ捨の草紙に声や筆津虫

*筆津虫＝蟋蟀の異名。

恋 張良の筆そへて後家に直下駄

△ 箱入に鳥羽の離宮へ内裏雛

△ 問ふ程の友は姫入て斉院下り

ハ 花鳥並居給ふ御離

△ 百しほも千しほも染て紅葉かる

△ 箱入の娘大赦よ弥生山

〃 持せては置ぬ一日の永平寺

〃 持たせては置ぬ三日の天が下

〃 薪迄新に伐て雪の宿

△ 置 よろつきた鹿 扱し奈良の町

〃 破れたる霧や無事で帰る雁

〃 大晦かけとりゐたる弓上手

〃 たらちめの胸迄痛ム十月腹

△ よろつきて葉の力味よし雨の蓮

△ 間の山惣下座をする江戸講中

△ 蒔 やあゝと煤掃招く鼠狩り

△ 荒磯の一しほ寒し入る月

△ 破れたる障子誉けり梅の風

△ 持せては置ぬ狸に荒る寺

△ 独 やあゝがつい呼び込んだ武者修行

△ すすき紙で梅花の香る中敷居

△ 恋 白い手の手伝いも有おくれ秋

△ 間 軍勢も只取る気持チ銭の占

△ 蒔 南鐐が出来て派のきく皮財布

△ 〃 南鐐＝二朱銀の異称。二枚で一分（いちぶ）、八枚で一両。

△ 破れたか草履拾て女郎買

△ 仕出したを古今へ饒る江戸錦

〃 破れたる堀から人目忍ぶ摺

〃 よろつきも三年坂に醒る酔

〃 一ウ

● 大晦としごもりする前後
△ 安物ではるを請合ふ炮六屋
袋 袖乞のふりも後には乞食染
ヲカ 飴売が来ると子供の針詮義
百モ 夕暮を灯ス三井のはれがまし
ハ軸 田唄勇まし続く豊年

撰句三十六章

郡頭 捨るせをまた宮替す松が岡
△ 蝶鳥も糸竹に飛ぶ花の里

*糸竹Ⅱ「糸」は琴、三味線などの弦楽器、「竹」は笛などの管楽器）①和楽器の総称。②音楽。

〃 しる人ぞ知る乞食に御衣一重
卷 卯の花も雪とながめて青簾
△ まつ黒に池水治す白髪首
五 小西が武略煙い清正
△ まつ黒な弁財天や古雛
句ヤ 娘へもゆかりの色の藤見客
△ 蝶鳥や傘干せば嬉しがり
ツキ 賑合につれて干鮭大明神
△ 二世迄毛鬢のてゐる象牙櫛
文 衣類迄まめでゐるかと里の母
△ 畑主の我物顔や舞雲雀
五 僧正が谷の草木は寝つ起つ
豆集 前は海後は山を頼みにて
前(かこ)は海後は山を頼みにて
駕昇(かこ)に落てもやめぬ廓(かこ)通い

二才

△ 神かけてとは手の物よ（みこ）神子の文
〃 しる人ぞ知るしる人がくれし梅
正 関所を腰につけし螺貝
宮 笠寺で丁度合羽が入て来た
△ 知る人に逢しも夢か宇津の山
〃 まつ黒な手は糸脈で見たかるふ

*糸脈で見ると糸脈は糸を用いて間接的に脈をはかる診察法の一つ。ここは、相手の心をはかる、気を引くといった意。

二才

〃 二世迄と言ふて口元ふいている
西 湖に稲の穂浪や虫の秋
三 拝殿も子供の春と出来上り
△ まつ黒な森追々に明烏

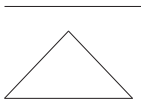
横須か柳門下巻

高一千句四百五十吟

はい百戦もの語

お高評

句百



直（ま）きにうれる
唐めいた
隠して仕舞ふ
物

冬も柳は柳也けり
流石じゃくくく
折ふしの事く
伽羅で檀の香を紛らかし
あらはらくくく
格式は知つて居れ共馴ぬ事
仰の通り肯くのみ也
いかにもくくく
後にくくとく

三才

ツキ

真つ白に成た

黒く／＼と見へる

一囀に言ふてのけるは表向き

見て来い／＼／＼

子守りさすのはおしいもの也

我暮る事也／＼

浮もあり沈むも有て浮世川

茶筌髪

姉娘

その外

柴折くべる山陰の店

立寄りにけり／＼

遠慮している／＼

若い心に／＼

豊にすめる君が代の民

△ 名目は残る浮世の伊達の木戸

遠 鍋売も繼に築摩の祭り前

冬 万石の使者にかぶりを軽ふ振り

△ 横顔に別れの櫛の袖の露

力 杓に蝶舞ふ三つの大窓

△ 船職の夢や覚れば嶋の月

〃 捻付んやうに子日の上達部

一 傾く運を胸に能登殿

△ 類なしが都国に曇る月の眉

伽 恋よりも無常を包む苦界の身

力 哥の手引で北面の武士

若 借金を潔くする祭り前

△ つかへたる花の浮巢や春の雨

繼 まつ白に成た一間が富士道者

△ 世に出た気や生花に室の梅

仰 中宿で氏を仕立てる玉の輿

四才

冬 綿入をかさねて出ては色娘

立 寺参り足元軽く後家の門

ツキ 黒く／＼と見へる愛宕のおけし髪

遠 雪と鷺同じ白さも後の母

ツキ まつ白に成た夕日の壇ノ浦

△ 類なしの類を集て七不思議

〃 取込みや猫も火燵も御国替

句 水鳥や己が時雨をそへてたつ

△ 問屋場の明を手柄や茶振廻

〃 類なしと給ふ三三の雪の朝

家 菓子盆に簪さして逃る女郎

△ 花ぐもり 嶺^(にわか)はれけり志賀の僧

立 横顔は人形遣ひの伝授也

直 蛭見のくれを待間の平等院

△ 去状を取ルと錦木立に来る

アラ 世に出てからはきたなし廓詞

△ 冬ざれの庭の風情や大柏

ツキ 黒く／＼と見へるは投に七十式

サス 鷹の羽の家中死ス共穂はつまず

△ 大力も家督にそへて譲る嶋

〃 取込で元の湖水や秋の末

〃 捻つけて三国一とすへる膳

〃 横顔を正面にして小傾城

〃 捻つけて鼻の名高し東福寺

〃 まだるひか虱を蚤が飛こした

〃 大力の開眼なるか帳祝ひ

四ウ

横がほに車大工を見知て居

橋は照る魚作の町はしぐれ哉

間屋場の硯は乾く長栗花落

五才

* 栗花落〓梅雨入り。旧暦五月初旬に栗の花が落ちることから
の当て字。「五月七日」とも書く。

まだるいは京の者でもとらぬ杓

よこ顔も正面もあり竈の神

イカ 抱付て見るは真剣勝負也

仰 金になる娘の跡にすはる母

子 忘八屋が女房に咄す^(くつわや)在戻り

* 忘八屋〓忘八は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八つの徳
目を失つて放蕩にふけり、遊里で遊ぶことの意。ここは、遊

女屋。

大力が看病に寄る狐つき

まだるいは鍛冶屋に隣りるみすや針

(三橋屋)

* 三栖屋針〓京都三条通河原町の針屋みすやの縫い針。京名物
の一。

つかへたて帆を上げさせぬ鳥羽の山

句 納豆汁香きく様に誉にけり

紫 折ふしは猿の手伝ふ虱がり

△ 取込で腰伸ス内をしぐれへり

子 三弦にのせても見たき手毬唄

△ 大力と大食を知る三井の奥

アラ 乗かけにあをつ合羽の引廻し

△ 有手から洩ル雷の冬仕事

横顔や障子に鼻の影ぼうし

五ウ

取込や簪押退てくる座頭

ツキ 真白に成たとそしる姫の襟

まつ白に成た夕べの初齒黒

△ とり込もしらでや馬が太こ打

大力の看板腕に彫てある

大力が首の真綿に持かねた

つかへたに二りで鐘持野雪隠

大力がまけて銭やる相の山

類なしと誉るは三日嫁の花

まつ白に成たは京の水の徳

軸繼 句高壹千弍百四十弍吟

本来死一坊丈評

六才(以下略)

*最後の二行は、次の六丁裏に書き抜かれた興行(無題)の記事で
あって、「百戦もの語」の記事ではない。

注

(1) 鈴木勝忠「三河高浜のお高前句付」(『近世俳諧史の基層——蕉風

周辺と雑俳』名古屋大学出版会 一九九二年 五四四頁)による。

なお、本書の中で、一説に樗良より一四歳年長との湖月亭知奈美手

記を紹介される。

(2) 注1と同書。五四三頁

(3) 注1と同書。五四七頁

(4) 奈良大学宮田正信博士旧蔵本

(5) 現在、原本の所蔵先不明。服部徳次郎氏からのコピーによる。

(6) 全取次を網羅したものではないため、鈴木氏が「三河高浜のお高
前句付」の中で挙げられた38の主要取次の内には、(表2)に載ら

ないものや所在地が異なるものもある。

(7) 東海近世文学会平成二十三年七月例会にてご教示をいただいた。

付記

貴重な資料をご提供いただきました吉沢義夫氏をはじめとして、服部徳次郎氏、天理大学附属図書館、奈良大学附属図書館には、心より謝意を表します。更に、鈴木勝忠先生宅での研究会（通称、寺子屋）、東海近世文学会七月例会での口頭発表において、貴重なご教示をいただきましたこと、心より謝意を表します。

本稿は、平成二十三年度相山女学園大学学園研究費助成金（C）、同年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号…二三五二〇二五七）による研究成果の一部であり、東海近世文学会平成二十三年七月例会での発表の一部である。

*生活科学部 生活環境デザイン学科